大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：杉本　守（教育心理学コース）

■研究題目

親になる前の乳幼児に対する情緒応答性の発達に関する研究
―表情認知の方法における親との差異に着目して―

■研究代表者・分担者 氏名

杉本　守（教育心理学コース）（代表者）

■研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）

問題と目的

我が国で長年続く少子化の傾向に伴い、親となる前に幼い子どもの世話をするなど、子育ての具体的な方法を知らないまま親となる者が増加しており（原田，2006）、育児にまつわる事件や臨床事例が増加する一因とされている（岡本・古賀，2004）。そして、子どもとかかわる経験がないまま親になることで生まれる問題として、乳幼児の発するメッセージを理解することが難しいという認知の問題と、仮に理解できたとしても対応できないという対処の問題が指摘されている（原田，2006）。

乳幼児の発するメッセージの認知及び対処の際に重要なものとして、情緒応答性がある。情緒応答性は、子どもの発するシグナルに気づき、正確に解釈し、適切なタイミングと方法で反応するという要素を持つ sensitivity の概念（Ainsworth, Waters, & Wall, 1978）が基礎となっている。情緒応答性は sensitivity の中でもとりわけ情緒的という側面と、子どもと養育者の関係性の特徴という側面に焦点化した概念であり（Bretherton，2000）、Emde & Score（1983/1988）は情緒応答性を「母子相互作用における乳児の情緒への気付きと共感的な反応及び母親の情緒提供という一連の応答能力」と定義している。

情緒応答性は乳幼児期の子どもとの相互作用において重要な役割を果たすと考えられるが、親となる前の時期から情緒応答性がどのように発達するのかはほとんど明らかになっていない。数少ない先行研究では、青年期から成人期初期の情緒応答性について認知側面から検討し、母親の結果と比較した上で未発達だと結論付けてきた（長屋・濱田・井上・深津，2008）。しかしながら、青年期後期から成人期初期でも、乳児との具体的な相互作用であるあやし行動の発達（中川・松村，2006；中川・松村，2010）を踏

まえると、乳幼児との接触経験を通して情緒応答性は発達すると考えられる。

そこで本研究では、日本版 IFEEL Pictures（以下、「JIFP」）を用いて未婚男女の情緒応答性と乳幼児との接触経験の関連を検討するとともに、父親及び母親の情緒応答性と比較し、青年期後期から親となるまでの情緒応答性の発達について検討することを目的とする。

方法

１．対象及び手続き

協力者は、筆者の知人あるいは知人の紹介、東北地方の A 市及び B 市に所在する保育園・こども園経由での実験協力依頼に承諾した 20 歳から 29 歳の未婚男女及び第一子が 24 ヶ月未満の父親、母親の計 101 名であった。内訳は、未婚男性が 28 名、未婚女性 28 名、父親 24 名、母親 21 名であった。平均年齢は、未婚男性が 25.74 歳（±1.97, 21 歳～29 歳）、未婚女性が 25.46 歳（±1.50 歳, 22 歳～28 歳）、父親が 30.57 歳（±5.49, 25 歳～49 歳）、母親が 29.46 歳（±3.53, 25 歳～38 歳）であった。また、父親と母親の第 1 子の平均月齢は父親で 8.67 ヶ月（±6.15）、母親で 7.92 ヶ月（±4.95）であった。実験は 2021 年 10 月中旬から 12 月上旬に実施した。倫理的配慮として、本研究の目的や方法、協力者の権利や研究結果の公表について書面で説明を行った。また、実験実施前にも、協力は任意であり中断や辞退が可能であること、個人が特定されることがないことなどを口頭で説明した。なお、本研究は東北大学大学院教育学研究科の研究倫理審査委員会の審査・承認を得て実施している（承認 ID：21-1-037）。

２．情緒応答性の把握

（１）材料

日本版 IFEEL Pictures

（２）JIFP の実施

実験は、オンライン会議システムを用いて実施した。実施にあたっては、回答者 1 名に対して検査者（男性）1 名が個別に JIFP を実施した。自由反応段階では、画面共有機能を用いて JIFP を回答者の端末に表示し、「ここに赤ちゃんの表情を撮った写真が 30 枚あります。この写真の赤ちゃんがあらわしている、一番強くてはっきりしている感情、情緒はどんなものでしょうか。心に最初に浮かんだ言葉をそのままできるだけ 1 つの単語で答えてください。回答には正しいとか間違っているというのはありませんから気楽にやってみてください」と教示し、自由に回答するよう促した。得られた口述反応は検査者が逐語的に記録した。その後、同じ 30 枚の乳幼児の表情写真について、それぞれの写真の赤ちゃんが表している感情や情緒が、どれくらい快か不快かについて、5 件法で回答を求めた。呈示順に反応できなかった場合は、全図版への回答終了後、再度反応するように求めた。また、曖昧な反応については質問を行い、回答の明確化を図った。

（３）回答カテゴリーの分類

長屋・濱田・井上・深津（2008）の作成した関係性評価カテゴリーに従って分類した。カテゴリー名と定義、反応例を表１に示す。30 枚の表情写真に対する自由反応を１枚ずつ分類し、反応数を得点化した。

表１　関係性評価カテゴリー（長屋ら，2008）

カテゴリー名		定義	反応例
D	逸脱	12ヶ月児としては不適切な感情。過剰な明細化・特殊化。逸脱した言語表現。刺激図版から離れた反応。	親の様子をうかがっている、企んでいる、強い警戒心、強い恐怖心
OS	対象希求	子どもが二者関係の中で感じている感情・情緒。相手の関心を引く行動。遊び相手として、あるいは聴衆・観衆として他者を求めている反応。	甘えている、行かないで、見てもらいたい、〇〇がいて嬉しい、遊んでほしい、かまってほしい、得意・自慢、「やったー」などの台詞、威張る、お茶目、おどけている、威張る
FN	欲求	子どもが要求・欲求を感じていたり、欲求が満たされない状況、理由を述べて否定的感情を説明する反応。	〇〇して欲しい、自己主張、わがまま、物を返してほしい、やきもち、いたずらしたい、うらやましい、むっとしている、駄々をこねている、我慢している、すねている、悔しい、不満
BE	基本的情緒	子どもの情緒を示す反応	嬉しい、怒っている、悲しい、楽しい、怖い、驚き、恥ずかしい、不安、人見知り、安心、安定、退屈、嫌だ、満足、興奮、ふざけている、落ち込んでいる、照れる
PS	生理	子どもの生理的な状態、及びそれに伴う快・不快感覚について述べた反応。	眠い、疲れた、おなかがすいた、痛い、寝起きでぼーっとしている、機嫌が悪い、気持ちがいい、気持ちが悪い、穏やか、あくび、おいしい
AC	思考・集中	子どもが一人で考えたり、集中して何かを行っている様子について述べている反応。	悩んでいる、困っている、考えている、一所懸命遊んでいる、集中している、疑問、反省、後悔、興味、好奇心、話を聞いている、面白い、不思議、じっと見ている
SD	状態	子どもの動作・表情の説明にとどまり、情緒について述べない反応。子どもの状態を説明する反応。	くしゃみをしている、（〇〇を）見ている、振り向く、ポーズを取る、泣いている、笑っている、ぼーっとしている、何も考えていない、普通の状態、おすまし
R	反応拒否	反応不能　反応拒否	

（４）回答の質的分類

小原（2010）を参考に、写真刺激に対する自由回答を表情焦点型と文脈焦点型に分類した。分類は、乳児の表情を解釈する際に、乳児の表情に焦点を当てて表情を解釈する場合は表情焦点型、乳児の表情だけでなく、想定された前後の文脈に焦点を当てて表情を解釈する場合は文脈焦点型とした。

（５）快・不快評定

「非常に不快」を１点、「やや不快」を２点、「どちらともいえない」を３点、「やや

快」を 4 点、「非常に快」を 5 点として得点化した。

３．質問紙

（１）フェイスシート

年齢と性別を尋ねた。また、父親と母親には第一子の月齢も回答を求めた。

（２）乳幼児との接触経験

花沢(1992)が乳幼児との接触経験の程度を測定するために作成した乳幼児接触経験尺度を修正して使用した。具体的には、花沢（1992）が作成した15項目のうち、現代の状況と合わない項目を削除するとともに、表現を一部修正した13項目を使用した。回答は「全くしたことがない」「1～2回したことがある」「3回以上たびたびしたことがある」の3件法で求めた。主成分分析を行ったところ、第1主成分の負荷量は全て.59以上であり、寄与率は52.91％、13項目のCronbachのα係数はα=.92であった。よって、この13項目は一次元構造であることが確認された。「全くしたことがない」を1点、「1～2回したことがある」を2点、「3回以上たびたびしたことがある」を3点と得点化して使用した。

結果

１．未婚者の情緒応答性と乳幼児との接触経験の関連

未婚者の情緒応答性と乳幼児との接触経験の関連を検討するため、各変数の相関係数を求めた。その結果、未婚男性では、乳幼児との接触経験と欲求の反応数に中程度の精の相関（r=.42,p<.05)、基本的情緒の反応数に中程度の負の相関（r=-.47,p<.01)、文脈焦点型の読み取り枚数と強い正の相関（r=.65,p<.001）が認められた。一方、女性では全ての変数において有意な相関が見られなかった。

表２　乳幼児との接触経験と情緒応答性の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
男性(n=28)	-.16	.25	.42*	-.47**	.20	.07	.06	.10	.65***	.31
女性(n=28)	.04	.23	-.21	-.24	.17	-.04	.27	.25	.22	.11

注）*p<. 05, **p<. 01, ***p<. 001。1=逸脱, 2=対象希求, 3=欲求, 4=基本的情緒, 5=生理, 6=思考・集中, 7=状態, 8=反応拒否, 9=文脈焦点枚数, 10=快・不快評定。

２．未婚者と親の情緒応答性の違い

（１）カテゴリー別の反応数平均値の比較

未婚男性、未婚女性と父親及び母親におけるカテゴリー別の反応数平均値の違いについて検討するため、対象者の属性を独立変数として、カテゴリー別の反応数平均値を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果、“対象希求”・“基本的情緒”・“思考・

集中”のカテゴリーにおいて群間の差が有意であった（“対象希求” $F(3,97)=4.91, p<.01, \eta^2=.13$ “基本的情緒” $F(3,97)=4.14, p<.01, \eta^2=.11$ “思考・集中” $F(3,97)=3.03, p<.05, \eta^2=.09$）ため、TukeyHSD 法による多重比較検定を行った。“対象希求”では、母親が未婚男性、未婚女性、父親より有意に高かった。“基本的情緒”では、未婚男性が父親、母親よりも有意に高かった。“思考・集中”では、有意な差が認められなかった。

表３　未婚男女と父親及び母親における各カテゴリー平均値の比較

	未婚男性(n=28)	未婚女性(n=28)	父親(n=21)	母親(n=24)	F	η^2	多重比較
逸脱	0.29 (0.66)	0.21 (0.69)	0.05 (0.22)	0.04 (0.20)	1.39	.04	
対象希求	2.00 (1.92)	2.04 (1.62)	1.76 (1.70)	3.54 (1.91)	4.91**	.13	1,2,3<4
欲求	2.68 (2.06)	4.11 (1.81)	2.95 (1.88)	3.25 (2.13)	2.70	.08	
基本的情緒	12.71 (4.14)	11.54 (4.87)	9.24 (4.61)	9.29 (3.06)	4.14**	.11	3,4<1
生理	4.32 (1.70)	4.50 (2.82)	6.19 (3.82)	4.71 (1.68)	2.46	.07	
思考・集中	5.29 (2.65)	5.14 (1.94)	6.81 (2.86)	6.71 (2.82)	3.03*	.09	
状態	2.68 (2.53)	2.32 (2.33)	2.95 (3.03)	2.38 (2.46)	0.31	.01	
回答拒否	0.04 (0.19)	0.14 (0.45)	0.05 (0.22)	0.08 (0.28)	0.66	.02	

注）括弧内は標準偏差。1=未婚男性, 2=未婚女性, 3=父親, 4=母親。$^*p<.05$, $^{**}p<.01$。

（２）質的分類の比較

未婚男性、未婚女性と父親及び母親における文脈焦点型の反応数の違いについて検討するため、対象者の属性を独立変数、文脈焦点型の反応数を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果、群間の差が有意であった（$F(3,97)=3.13, p<.05, \eta^2=.09$）ため、TukeyHSD 法による多重比較検定を行ったところ、母親が未婚男性と比較して情緒応答性が有意に高かった。

表４　未婚男女と父親及び母親における文脈焦点型の読み取り数の比較

	未婚男性 (n=28)	未婚女性 (n=28)	父親 (n=21)	母親 (n=24)	F	η^2	多重比較
文脈焦点型	3.18 (3.32)	3.79 (3.69)	5.19 (4.93)	6.50 (5.09)	3.13*	.09	1<4

注）括弧内は標準偏差。1=未婚男性, 2=未婚女性, 3=父親, 4=母親。$^*p<.05$。

（３）快・不快評定の比較

未婚男性、未婚女性と父親及び母親における快・不快評定の違いを検討するため、対象者の属性を独立変数、快・不快評定を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果、群間の差に有意な差は認められなかった（（$F(3,97)=1.07$,n.s.）。

考察

１．未婚者の情緒応答性と乳幼児との接触経験の関連について

未婚者における乳幼児との接触経験と情緒応答性の関連を見ると、未婚男性では、乳幼児との接触経験が多いほど、乳児の表情から子どもの要求や欲求を読み取るようになり、単純な情緒を読み取らなくなることが示された。また、乳児の表情を解釈する際に子どもの表情のみではなく、想定される前後の文脈の情報も用いながら表情を解釈するようになることも示された。一方、未婚女性では、乳幼児との接触経験は情緒応答性と関連しないことが示された。先行研究では情緒応答性は養育経験によって発達するとされていたが（例えば、平野・濱田・井上・深津・滝口・小此木，2003；長屋・濱田・井上・深津，2008 など）、男性においては、親となる前でも養育と類似する乳幼児との接触経験を重ねることで情緒応答性が発達することが示唆された。一方で、未婚女性については、幼少期から乳幼児との接触経験を多く重ねる環境に置かれると考えられ（Fogel & Melson, 1989）、青年期後期以前に情緒応答性を発達させている可能性が示唆される。

２．未婚者と親の情緒応答性の違いについて

未婚男女と父親・母親の比較において、カテゴリー別の反応平均数では、“対象希求”・“基本的情緒”・“思考・集中”のカテゴリーで有意な差が見られた。また、“対象希求”では母親が最も多く反応を示したが、未婚男女と父親に有意な差は認められず、“基本的情緒”においても、未婚男性は父親、母親より多く反応を示したものの、未婚女性と父親、母親には有意な差は見られなかった。文脈焦点型の反応数は母親が未婚男性と比較して有意に多かった。快・不快評定については、有意な差は見られなかった。“対象希求”・“基本的情緒”・“思考・集中”のカテゴリーで有意な差がみられ、“対象希求”は親が多く、“基本的情緒”は未婚者が多いのは、女子大学生と母親の差を検討した長屋・濱田・井上・深津（2008）の結果と同様である。また、養育経験があるほど文脈焦点型の読み取りを行うことも、小原（2010）と合致する。長屋（2008）は、“対象希求”に分類される反応は、子どもからの情緒的相互作用の促しに対する敏感さの程度、“基本的情緒”の反応は、子どもと関係性を解釈せず情緒の状態のみを認知する程度、“思考・集中”の反応数は子どもの自主性を見守る程度であるとしている。つまり、親となり養育経験を重ねることで、乳児の情緒シグナルを単純な情緒と捉えることが減り、乳児への養育行動を決定するための情報として解釈するようになると考えられる。また、その

際に、乳児の表情のみでなく想定される前後の文脈情報にも着目し、より多様な情報をもとに表情を解釈するようになると考えられる。ただし、未婚女性と父親にはカテゴリー別の反応数も文脈焦点型の反応数にも有意な差は認められていない。この結果から、未婚男女における乳幼児との接触経験と情緒応答性の関連も踏まえると、男女で情緒応答性の発達の時期やメカニズムが異なることが示唆される。また、快・不快評定に有意な差が見られていない点は先行研究と異なる。長屋・濱田・井上・深津（2008）は子どもへの肯定的感情が表情の解釈に影響を及ぼすことを指摘している。本研究の対象の平均年齢が大学生より高く、妊娠期と比較し育児などへの不安を感じていないため、親と同程度に乳児の表情を肯定的に解釈できたと考えられる。

３．まとめと今後の課題

本研究は、青年期後期及び成人期初期の未婚者の情緒応答性に、乳幼児との接触経験が及ぼす影響を検討するとともに、父親及び母親との比較を通して情緒応答性の発達に関する示唆を得ることが目的であった。男性では、青年期後期及び成人期初期に乳幼児との接触経験を重ねることで、想定される前後の文脈をもとに情緒シグナルを解釈するとともに、乳児の情緒シグナルから子どもの要求や欲求などを読み取るようになることが示された。また、親となることで、子どもからの情緒的な関わりや子どもの思考状態など、情緒シグナルから養育に必要となる多様な情報を読み取るようになることが示唆された。

一方、少子化傾向にある我が国の状況を踏まえれば、未婚者が子どもとかかわる機会を数多く持つことは非常に難しいと言わざるを得ない。また、未婚女性は乳幼児との接触経験と情緒応答性の関連は認められなかった。親となる前の時期における具体的な支援に関する示唆を得るためにも、情緒応答性と関連する心理的要因についても検討する必要がある。

参考文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S.(1978). *Patterns of attachment：A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ：Lawrence Erlbaum Associates.

Bretherton, I. (2000). Emotional availability：An attachment perspective. *Attachment & Human Development*, 2(2), 233-241.

Emde, R. N., Score, J. F.(1988). 乳幼児からの報酬：情緒応答性と母親参照機能. 乳幼児精神医学(pp.25-48) 岩崎学術出版社. (Emde, R. N.,Score, J. F.(1983). The reward of infancy: Emotional availability and maternal referencing. In J. D. Coll, E. Galenson, & R.L.Tyson (Eds.), *Frontiers of infant psychiatry*. New York: Basic Books)

Fogel, A. D. & Melson, G. F. (1989). 子供の養護性の発達　小嶋秀夫（編） 乳幼児の

社会的世界（pp.180-186）　有斐閣

花沢 成一(1992). 母性心理学 医学書院

原田 正文 (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援. 名古屋大学出版会

平野 直己・濱田 庸子・井上 果子・深津 千賀子・滝口 俊子・小此木 啓吾.(2003). 日本版 IFEEL Pictures の研究--基礎資料の検討. 学校臨床心理学研究, (1), 91-99.

長屋 佐和子・濱田 庸子・井上 果子・深津 千賀子 (2008). 日本版 IFEEL Pictures の研究: 関係性評価カテゴリー作成の試み. 精神分析研究, 52(1), 18-29.

中川 愛・松村 京子.(2006). 乳児との接触未経験学生のあやし行動: 音声・行動分析学的研究. 発達心理学研究, 17(2), 138-147.

中川 愛・松村 京子 (2010). 女子大学生における乳児へのあやし行動: 乳児との接触経験による違い. 発達心理学研究, 21(2), 192-199.

小原 倫子 (2010). 母子関係における情動認知の発達—生後 4 ヶ月から 12 ヶ月までの縦断研究—, 愛知江南短期大学紀要, 39, 27-37.

岡本 祐子・古賀 真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. 広島大学心理学研究, (4), 159-172.